

チエインジザワールド

猿橋 勇人

キャスト 少女A

少女B

舞台中央に女子高生（少女A）。

その女子高生のまわりをうろついているもう一人の女子高生（少女B）。

少女A 笑う門には福来る。笑っていれば幸せがやってくるって、どこかの誰かが言っていた。名前も知らないどこかの誰か。その人は笑っていた。ニコツと笑っていた。ちよっと気持ち悪かったけど、その人にはきっと幸せがやってくる。どんな幸せなのかは分からないけど、きっと幸せがやってくる。すがすがしい笑顔だろうが、ちよっと気持ち悪い笑顔だろうが、笑顔であればどっちでもOK。未経験者大歓迎ってくらい、ハードルは低い。笑顔のクオリティはこの際関係ない。

少女B そんなことよりカラオケ行かない？

少女A 神様のような存在がいるとして、もしかして神様は

私たちの顔をずっと見ているのかな。

少女B そんなことよりカラオケ行かない？

少女A だとしたら、ちよっと気持ち悪いな。

少女B そんなことよりカラオケ行かない？

少女A 幸せってどんな形してるんだろ。やってくるってことは、足でも生えてるのかな。だとしたら二足歩行なのかな。四速歩行なのかな。しっぽは生えてるのかな。草食かな。肉食かな。鼻は長いのかな。お母さんの鼻も長いのかな。ウソをついたらもっと長くなるのかな。

少女 B そんなことよりカラオケ行かない？

少女 A ごめん、今日は部活行かなきゃいけないから。

少女 B そんなことよりカラオケ行かない？

少女 A 世界は一瞬にして切り替わる。

少女 B え？

少女 A チェインジザワールド。

一瞬に世界が切り替わる。

そこは演劇部の部室。

少女 A 先輩。地区大会どうするんですか。

少女 B もちろん出るよ。

少女 A 二人でですか？

少女 B 二人いれば十分。

少女 A でも、二人でキャストは無理ですよ。

少女 B 何で？

少女 A いや、だって音響とか照明とか、二人舞台に出ちゃったら操作する人いないじゃないですか。

少女 B そんなの顧問に任せればいいんだって。

少女 A そんなのって。

少女 B 基本的には、音響も照明もいらない。

少女 A 基本的にはの意味が分からないです。

少女 B なんかさ、当たり前のように音響がバーンってなつて、当たり前のように照明がキラキラってして、そういうの気持ち悪いんだよね。

少女 A 言ってる意味が分からないです。かっこいいじゃないですか。音響がバーンってなって、照明がキラキラってして、その中で演技ができるなんて、普通そんな経験できないですよなかなか。

少女 B 興味ない。

少女 A 興味なくて何で演劇部入ったんですか。

少女 B なんかもったいないなって思ったから。

少女 A 何がもったいないんですか。

少女 B 何がもったいないの。

少女 A その何かを教えてくださいよ。

少女 B 言葉にすると安くなるから言わない。

少女 A 思わせぶりですね。

少女 B そんなことより発声練習しない？

少女 A あ、話すり替えた。

少女 B すり替えるなんて柔なものじゃないよ。話の骨を折

ってやったのよ。複雑骨折よ。複雑に話の骨を折っ

てやったのよ私は。

少女 A 分かりました分かりました。複雑骨折です。全治 6

ヶ月です。発声練習しましょう。アレでいいです

か？北原白秋リミックス。今日は先輩からですよ。

少女 B うん。

少女 A じゃあお願いします。

少女 B それでは！北原白秋リミックス！

少女 A 北原白秋リミックス！

少女 B あめんぼ あかいな きよねんより

少女 A あめんぼ あかいな きよねんより

少女 B うきもに こえびも およいでる

少女 A うきもに こえびも およいでる

少女 B およいでるさいちゅうに こえかけられると ちよ

っとむかつく

少女 A およいでるさいちゅうに こえかけられると ちよ

っとむかつく

少女 B きもちよく およいでたのに

少女 A きもちよく およいでたのに

少女 B かきのき くりのき そのきなんのき きになるき

少女 A かきのき くりのき そのきなんのき きになるき

少女 B きつつき こつつこつ やりすぎて

少女 A きつつき こつつこつ やりすぎて

少女A て、当たり前のように照明がガラガラってして、その
ういうの気持ち悪いんだよね。
言ってる意味が分からないです。かっこいいじゃない
いですか。音響がバーンってなって、照明がガラガラ
ラってして、その中で演技ができるなんて、普通そ
んな経験できないですよ。あれ？変わってない。
興味ない。
少女B おかしいな。
少女A なんかもったいないなって思ったから。
少女B じゃあもう一回。
少女A 何かがもったいないの。
少女B チェインジザワールド。

—
瞬に世界が切り替わる。

少女B 正しい人間になりたいと思う。
少女A そんなことよりファミレス行こうよ。
少女B 間違いのない人間になりたいと思う。
少女A そんなことよりファミレス行こうよ。
少女B 私が私に問いかけてくる。それらしい顔して問いか
けてくる。「じゃあ、あなたの思ってる正しさって何
なのさ」って。
少女A あんた、あの子の何なのさ。まあ、分かる人だけ分
かればいいか。
少女B 私は答えに詰まる。私は正しさを知ってるつもりで
いたけれど、目の前に運ばれてきた正しさは、よく
分からない形をしていて、目の前にあるのに、ピン
トが合わない。ぼんやりしてる。
少女A あんた、あの子の何なのさ。まあ、分かる人だけ分
かればいいか。
少女B 正しい人間になりたいと思う。

少女 A そんなことよりファミレス行こうよ。
少女 B 間違いのない人間になりたいと思う。
少女 A そんなことよりファミレス行こうよ。
少女 B 目の前にあった正しさは、3秒後に姿を変えた。
少女 A そんなことよりファミレス行こうよ。
少女 B その3秒後、また姿を変えた。でも、ぼんやりして
いて、やっぱりよく分からない。
少女 A そんなことよりファミレス行こうよ。
少女 B ごめん、今日は部活行かなくちゃ。
少女 A じゃあ私は世界を一瞬にして切り替える。
少女 B え？
少女 A チェインジザワールド。

一瞬にして世界が切り替わる。
そこは演劇部の部室。

少女 B 先輩、地区大会出ましようよ。
少女 A 無理だって、二人しかいないんだよ。二人しか。
少女 B 二人でも出ましようよ。どんな形だっていいですか
ら。
少女 A どんな形でもいいって簡単に言うけどさ。
少女 B 別に簡単にか、軽い気持ちで言ってるんじゃない
ですよ。顧問だって協力してくれるって言うってくれ
たじゃないですか。
少女 A でもさ。
少女 B それに先輩、今年で引退じゃないですか。このまま
何もしないで引退させるのは私がイヤです。
少女 A 別にいいよ。文化祭もあるし。
少女 B そういうことじゃないんですよ。
少女 A 別にいいってこのまま引退したって。
少女 B させません。それに先輩、本当は出たいんですよ、

少女A 地区大会。

少女A うん。

少女B じゃあもう、そんなじれったい態度取らないで一緒に考えましょうよ。地区大会にどんな形で出るのか。

少女A 分かった。

少女B 私、先輩の演技好きなんですよ。

少女A 何さいきなり。

少女B 私、本当はテニス部入るつもりだったんですよ。

少女A そうだったの？

少女B はい。中学のときはソフトテニス部入ってたんで。

少女A まあ、弱かったんですけどね。

少女A ふーん。

少女B だから、テニス部に入ろうとは思ってたんですけど、ちよっと迷ってた部分もあって。

少女A それで演劇部？

少女B だって、新入生オリエンテーションのときの演劇部の紹介、すごいインパクトあったじゃないですか。

少女A そんなにだった？

少女B 人によってはトラウマになりますよ。顔を白く塗った女子高生の集団が新入生を取り囲むって。

少女A 引退した先輩が考えたんだよね。先輩アングラ好き

だったから。あのあと先生たちにも怒られたし。

少女B 結局入った部員私だけでしたもんね。

少女A 今考えたら仕方ないよね。よく入ったなって思うよ。なんか、変わるかもしれないって、なんとなく思

少女B ったんですよ。

少女A そうなんだ。

少女B 去年の地区大会の先輩の演技、最高でしたよ。

少女A 自分では分からないよ。

少女B 物語の途中でいきなり上手から出てきて、客席に向かって「お隣さんからたくさんたけのこもらったけ

ど、私だけのこ嫌いなの」って叫んで下手にはけるって。あれ何だったんですか？

少女A 引退した先輩が創作した脚本だったからね。あのときも「これ何ですか？」って聞いたけど、「必要不可欠なシーンだ」って言われて、それでおしまい。「そうなんですか」ってしか言えなかった。

少女B すごかったですよ。引退した先輩。

少女A あの世代の先輩たちがすごかったんだよ。みんな引退して、私たち二人だけになっちゃって。

少女B はい。

少女A 一人芝居はイヤだよ。出るなら二人で出たい。

少女B でも、二人共舞台に出ちゃったら音響とか照明とかどうするんですか。

少女A 照明は先生にお願いする。音響はないならしないで仕方ない。

少女B あったほうがいいですけどね。

少女A 仕方ないよ。それよりも、二人で舞台に立って、二人で演技したい。そっちのほうが私は大事。

少女B 分かりました、私は先輩の意思を尊重します。

少女A ありがとうございます。

少女B 脚本はどうします？

少女A もしよかったら、私に書かせてくれないかな。

少女B これからですか？
うん、大会まで時間がないのは分かっている。でも、後悔したくないから。お願い。アイデアはあるんだ。

少女B 分かりました。じゃあ、大会は先輩の創作脚本で出しましょう。

少女A ありがとうございます。

少女B はい。

少女A あ、ついでにもうひとつやりたいことがあるんだけど

ど。

少女 B 何ですか？

少女 A 世界を一瞬にして切り替える。

少女 B え？

少女 A チェインジザワールド。

世界が一瞬にして切り替わる。

真っ暗。

少女 A 先輩。

少女 B 何？

少女 A 暗闇って、暗いですね。

少女 B そうだね。だから暗闇っていうんだよね。

少女 A 何も見えないですね。

少女 B 目を閉じて何も見えず。

少女 A 開けても何も見えません。

少女 B だって、暗闇だもんね。

少女 A そうですね。先輩。

少女 B 何？

少女 A やっぱり無理ですよ。照明はあったほうがいいです。

少女 B そうかなあ。

少女 A 無理ですよ。

少女 B 大丈夫だと思うんだけどなあ。

少女 A 先輩の大丈夫の基準が分かりません。

少女 B 私が大丈夫って言えば、大丈夫なのはあ。

少女 A はあ。

しばらく沈黙。

呼吸の音のみが聞こえてくる。

少女 A これはダメですよね。

少女 B 何が？

少女 A 暗闇で、しかもこの沈黙、放送事故レベルですよ。お詫びしなきゃいけないやつですよこれ。

少女 B テレビでもラジオでもないんだから、大丈夫でしょ。そういうことじゃなくて。

少女 A しかもこれ事故じゃないし。音があるはずのところ
少女 B で音が出ないのもしかしたら事故かもしれない。でもこれはそうじゃないよ。故意に沈黙を作ったんだから。

少女 A でも、よくないとは思いますよ。

少女 B じゃあ騒ぐのはいいの？沈黙はダメで、ドンチャン騒ぎはお咎めなし？何その基準。そっちのほうが意味分かんないよ私は。何がよくて何がよくないか、そんなの3秒単位でコロコロ変わるよ。

少女 A そんなには変わらないですよ。

少女 B 頭かたいなあ。

少女 A 先輩の頭がやわらか過ぎるんですよ。

少女 B そんなことないって。むしろかたくなきゃこんなことできないよ。

少女 A そうなんですか？

少女 B これはいけるって信じきらなきゃ、できないよ。

少女 A 先輩、やっぱり頭がやわらかいんですね。

少女 B そうなのかもね。

少女 A 先輩、もうちょっとシーンとしてみませんか？

少女 B あれ？放送事故レベルって言ってなかったっけ？

少女 A だって、事故じゃないですもん。自分たちで決めた沈黙ですから。

少女 B 分かった。じゃあ、しばらくシーンとしますか。

少女 A そうしましょう。

しばらく沈黙。

呼吸の音のみが聞こえてくる。

少女 B どう？

少女 A これはこれで悪くないですね。

少女 B でしょ？

少女 A はい。

少女 B じゃあ、もうちょっと。

少女 A すみません、ちょっとやらなきゃいけないことがあって。

少女 B 何？

少女 A 世界を一瞬にして切り替えたいんです。

少女 B え？

少女 A チェインジザワールド。

世界が一瞬にして切り替わる。

少女 B 私は正しい。

少女 A すごいなあ。

少女 B 私のやっていることは正しい。

少女 A すごいなあ。

少女 B そう思い込まなきゃやっていけない。

少女 A すごいなあ。

少女 B 直径1ミリの不安も自分の中に作ってはいけない。

少女 A すごいなあ。

少女 B 私は正しい。

少女 A すごいなあ。

少女 B そう思い過ぎてはいけない。

少女 A なんじゃそりゃ。

少女 B 直径1ミリの不安を取り除いてはいけない。

少女 A なんじゃそりゃ。

少女 B 自分は正しいと思いき過ぎてはいけない。

少女 B どう見るかは人それぞれですから。

少女 A でも「つまんなーい」って思われるのもなんかね。

少女 B 人それぞれですよ。

少女 A まあね。

少女 B でもまあ、個人的には分かりやすいものもいいです

けど、分かりにくいのもそれはそれでいいと思いま

すよ。

少女 A そう？

少女 B 私はですけどね。人それぞれですから。

少女 A うん。

少女 B じゃあ、これでいきましょう。

少女 A ありがとうございます。なんか、すごいなあ。

少女 B 何がすごいんですか？

少女 A 先輩と後輩が逆みたい。

少女 B 何言ってるんですか。先輩は先輩です。

少女 A でも、エネルギーっていうか、引っ張る力っていう

か、そういうのが、すごいなあって思ってる。

少女 B ありがとうございます。

少女 A 私もそうなら良いのに。

少女 B 先輩にもありますって。

少女 A そうなれたらいいのに。

少女 B 大丈夫ですって。

少女 A そうなりたかった私は。

少女 B はい？

少女 A 世界を一瞬にして切り替えた。

少女 B え？

少女 A チェインジザワールド。

世界が一瞬にして切り替わる。

真っ暗。

少女 A 先輩。

少女 B 何？

少女 A 先輩はすごいですね。

少女 B 何よいきなり。

少女 A なんか、エネルギーっていうか、引っ張る力ってい

うか、すごいなああって。

少女 B 別にすごくないよ。

少女 A 私はそうはなれません。

少女 B 分からないよそれは。なれるかもしれないし。

少女 A なれません。私にはこう、中身がないんです。何か

を表現したいとか、何かを伝えたいとか、そういう

漠然としたものはあるんですけど、その肝心な「何

か」が私にはないんです。そこだけポッカリ穴が空

いてるというか、だから、薄っぺらで軽いんです。

でも、表現するには「何か」がなきゃいけないと思

うんです。でも、ないんです。私には。

少女 B そうなんだ。

少女 A その点、先輩はその「何か」がミッチリ詰まってる

感じがして、ズッシリと重みがあって、尻尾まであ

んこが詰まったたい焼きみたいな感じがします。

少女 B 何それ。

少女 A だから、なんか、何もない私がここにいてもいいの

かなって。

少女 B いてもいなくても、世界にとっては関係ない。

少女 A え？

少女 B いてもいなくても世界に影響は、ない。

少女 A やっぱりそうですね。

少女 B でも、私には関係ある。影響も、ある。

少女 A 先輩。

少女 B いるといないじゃ大違いよ。月とすっぽんと部屋と

ワイシャツと私と酒と泪と男と女よ。

少女 A それはよく分からないです。

少女 B とにかく、私にとっては大問題ってこと。それだけじゃ不満？

少女 A いえ、ありがとうございます。

少女 B 私だって、別にこれといって何かがある訳でもないし、ただ、それっぽくしてるだけ。

少女 A それっぽく？

少女 B それっぽくできたら、それで充分。私はね。

少女 A そうなんですか。

少女 B、少女 A に向かって懐中電灯で光を当てる。

少女 A まぶしっ。いきなり何ですか。

少女 B スポットライト。電力は乾電池。

少女 A まだ目が慣れません。

少女 B 表現したいんでしょ？

少女 A はい。

少女 B でも、何を表現したらいいか分からない。

少女 A はい。

少女 B そういうときは、叫ぶのよ。ただただ叫ぶのよ。

少女 A それって表現ですか？

少女 B 何が表現で何が表現じゃないのか、それって大切？

少女 A そんなもの、3秒単位でコロコロ変わるよ。

少女 A でも、何を叫べばいいんですか。

少女 B 何でもいいのよ。叫びたいことを、ただただ叫ぶの。

少女 A 分かりました。

少女 B じゃあ、どうぞ。

少女 A お隣さんからたくさんたけのこもらったけど、私たけのこ嫌いなもの！

少女 B 何それ。たけのこ嫌いなもの？

少女 A あ、大好きですよ。なんか、夢で見たんです。地区

大会で、あ、ちょうどこのホールだったんですけど、さっきのセリフ叫んだんですよ。その前後は覚えてないんですけど、そこだけ覚えてて。せっかくだから、叫んでみました。

少女 B そうなんだ。すごいシュールな夢だね。

少女 A ありがとうございます。

少女 B 別に褒めてないけどね。

少女 A 分かってますよ。でも、ありがとうございます。

少女 B じゃあ、どういたしました。

少女 A ちよっとスッキリしました。

少女 B それならよかった。

少女 A、少女 B に向かって懐中電灯で光を当てる。

少女 B うわ、まぶしっ。

少女 A そうなんですよ。まぶしいんですよ。

少女 B 目が慣れないな。

少女 A 売野（うりの）先輩。

少女 B 何？

少女 A ここまでつきあってくれて、ありがとうございました。

少女 B どういたしました。こちらこそありがとうございました。もうこれで未練はなくなっただ。

少女 A これで先輩も安心して成仏できますね。

少女 B 別に死んでないよ私。これでスッキリ引退できる。

少女 A じゃあよかったです。

少女 B でも分からないよ。消えたと思った未練が息を吹き返すことだってあるかもしれない。未練がない人は

きつと、「未練はない」なんてわざわざ口では言わな

いよ。でも、あえて言うよ。もう未練はない。

少女 A なんか、ややこしくてめんどくさいですね。いろいろ

ろと。

少女 B ややこしくてめんどくさいのよ。いろいろと。

少女 A まあ、仕方ないですね。いろいろありますから。

少女 B 中森（なかもり）ちゃん。

少女 A 何ですか？

少女 B 表彰状。中森ちゃん。あなたは、過剰な自意識を手
懐け、コップからあふれ出た自意識を見事他人への
思いやりに変化させ、他愛のない人生にドロップキ
ックをお見舞いし、コバルトブルーの青春に別れを
告げ、他愛に満ちた、いとをかし人間に成長したこ
とを、ここに表彰します。売野より。

少女 A 意味が分からないです。

少女 B 大丈夫。私も意味分からないから。

少女 A それであれば問題ないです。先輩、もう一回だけい

少女 B いますか？

少女 B またやるの？

少女 A これで最後です。このややこしくてめんどくさい物
語を終わらせたいんです。とりあえず。

少女 B 分かった。最後のチェインジザワールドね。

少女 A はい。

少女 B じゃあ、どうぞ。

少女 A この物語を終わらせるために。

少女 B 終わらせるために？

少女 A 世界を一瞬で切り替えた。

少女 B 最後の。

少女 A チェインジザワールド。

世界が一瞬にして切り替わる。
オープニングに戻る。

少女 A 笑う門には福来る。笑っていれば幸せがやってくる

って、どこかの誰かが言っていた。名前も知らない
どこかの誰か。その人は笑っていた。ニコツと笑っ
ていた。ちょっと気持ち悪かったけど、その人には
きっと幸せがやってくる。どんな幸せなのかは分か
らないけど、きっと幸せがやってくる。さすがし
い笑顔だろうが、ちょっと気持ち悪い笑顔だろうが、
笑顔であればどっちでもOK。未経験者大歓迎って
くらい、ハードルは低い。笑顔のクオリティはこの
際関係ない。

少女 B

そんなことより部活行かない？

少女 A

神様のような存在がいるとして、もしかして神様は
私たちの顔をずっと見ているのかな。

少女 B

そんなことより部活行かない？

少女 A

だとしたら、ちょっと気持ち悪いな。

少女 B

そんなことより部活行かない？

少女 A

幸せってどんな形してるんだろ。やってくるってこ
とは、足でも生えてるのかな。だとしたら二足歩行
なのかな。四速歩行なのかな。しっぽは生えてるの
かな。草食かな。肉食かな。鼻は長いのかな。お母
さんの鼻も長いのかな。ウソをついたらもっと長く
なるのかな。

少女 B

そんなことより部活行かない？

少女 A

そんなことよりカラオケ行かない？

少女 B

え？

少女 A

カラオケ、一緒に行こうよ。

少女 B

でも、大会近いよ。

少女 A

いいじゃん。

少女 B

芹沢（せりざわ）先生に怒られるよ。

少女 A

怒らないよ。芹沢先生怒ったところ見たことないし。
それよりもなんか、思いつき楽しみたいんだよね。
今日は。

少女 B 分かった。じゃあ、そのあとファミレス行こうよ。
少女 A いいね。行こ行こ。
少女 B 何食べようかな。
少女 A 想像するだけで、笑っちゃうよね、なんか。
少女 B 幸せそうな顔だね。
少女 A そう見える？
少女 B うん。
少女 A じゃあ、きっと私は幸せ者だ。
少女 B 何それ。
少女 A ほら、早く行こうよ。
少女 B うん。カラオケ、何歌う？
少女 A 何歌おうかな。あ、「少女 A」でも歌おうかな。
少女 B 懐かしいね。
少女 A よく知ってるね。

幕。